



農作業メモ

麦類は種期の栽培管理

令和元年産の大麦は、冬期の乾燥による莖数不足と、5月の高温乾燥に伴う登熟の抑制により小粒化し、減収となりました。一方、11月中下旬まきの小麦は、春先以降の降雨により分けつが増加し、有効莖数が確保されました。また、5月以降の定期的な降雨により、登熟は順調に進み、収量は平年並みからやや多収で品質は良好でした。

近年、異常な天候により、作柄が不安定になりやすくなっています。収量と品質の向上にむけて、基本技術を励行しましょう。

1 ほ場準備

○地方の維持、土壌物理性向上のため、稲わらや堆肥を積極的に施用しましょう。稲わらに石灰窒素を添加すると腐熟促進効果があります。

○冬季の乾燥と成熟期の高温に備えて、作土層を深くし、麦の根域を拡大しましょう。枯熟れが発生しやすいほ

場では、作土深20cmを目標に、毎年2〜3cmずつ深耕しましょう。

○発芽・苗立ちを安定させるため、丁寧に碎土し、碎土率を高めましょう。

2 施肥

○麦類は酸性に弱いいため、苦土石灰やケイカル等の石灰質資材を施用し、pH6.5以上を目標に酸度矯正しましょう。

○基肥及び追肥は、適正量を施用しましょう（表1、2）。

表1 水田ドリルまきでの施肥料 (kg/10a)

品種	基肥	追肥
	化成肥料444 (14-14-14)	化成肥料17-0-17 (17-0-17)
さとのそら	60 (〜70)	12 (〜24)
あやひかり	60 (〜70)	12
彩の星	50	12
すずかぜ	50	12

表2 基肥一発体系での施肥料 (kg/10a)

品種	軽量さとのそら専用 (22-10-10)
さとのそら	45

3 排水対策

○湿害を防ぐため、明きよ（排水溝）と弾丸暗きよを施工しましょう。

○明きよは、ほ場の外周と5〜10m間隔に施工し、排水口へつなげます。

○弾丸暗きよは、本暗きよに交差するように2〜3m間隔で施工します。

4 は種

○大麦は11月5日〜20日、小麦は11月10日〜25日がは種適期です。早まきは凍霜害、縞萎縮病のリスクが高まり、遅まきは十分な生育が確保できません。は種適期の晩限までに作業が終わるように作業計画を立てましょう。

5 雑草防除

○除草剤の効果を高めるため、土塊が残らないように碎土を丁寧に行います。

○は種後、土壌が乾燥している場合は、ローラーで鎮圧し、薬液量を多めにし、土壌処理剤を散布します。

○降雨等で、適期に土壌処理剤を散布できない場合は、麦の出芽直後に使用できる莖葉兼土壌処理剤を使用しましょう（表3）。

○ほ場で優先的に生えている雑草を見極めて、目的に合った除草剤を使用しましょう。

表3 は種〜生育初期の土壌処理剤及び莖葉兼土壌処理剤の例（令和元年8月28日現在の登録内容）

種類	農薬名	使用時期※
土壌処理剤	クリアターン乳剤/細粒剤F※	は種直後
	ロロックス	は種後〜発芽前
	トレファノサイド乳剤/粒剤2.5	は種後出芽前
	ゴーゴーサン細粒剤F	は種後出芽前
莖葉兼土壌処理剤	ゴーゴーサン乳剤	大麦：は種後出芽前 小麦：は種後〜麦2葉期
	ボクサー	は種後〜麦2葉期
	リベレーター-G	
	リベレーターフロアブル	は種後〜麦3葉期

※使用時期の一部を抜粋しています。
※クリアターン乳剤（細粒剤F）は、ロロックス、ゴーゴーサン細粒剤F（乳剤）と同一成分を含みます。

除草剤の使用にあたっては、ラベルをよく読み、登録内容にしたがって使用しましょう。使用記録は必ずつけ、飛散防止に努めましょう。